小郡の偉人

野田宇太郎

問 野田宇太郎文学資料館 ☎72・7477

令和6年は、小郡市松崎出身の野田宇太郎が亡くなって、40年目の年です。「詩人」「編集者」そして「文学散歩の創始者」として昭和の時代に活躍した野田に関して、改めて皆さんにご紹介します。

過去の目標を失えば 同時に未来の目標も失う

詩人

野田は明治42(1909)年に生まれ、立石尋常小学校、旧制朝倉中学校(現在の県立朝倉高等学校)、早稲田大学へと進みますが、病気のため学業を断念し帰郷します。その頃から詩作を始め、20代で3冊の詩集を刊行します。そして33歳で出した『旅愁』は1万1,000部を売り上げ、詩集としては珍しいベストセラーとなりました。『旅愁』収録の「水鳥」は野田の代表作の一つで、故郷の松崎(桜馬場)には「水鳥」の詩碑が建っています。

写真に落書き!?

この写真は、病気のため学業を断念したときに、その悔しさから思いを書きなぐったものだそうです。
なんて書いてあるのか解読できない部分もあり、かなり憤りを感じていたことが分かります。

編集者

野田は31歳で上京して小山書店へ入社し、半年ほどで雑誌「新風土」の責任編集を行うまでになります。また本の出版では、編集者として関わった下村湖人の『次郎物語』がベストセラーになり、後に映画・ドラマ化もされ人気を博します。次に入社した河出書房では、戦争末期の資材不足のなか編集責任者として雑誌「文藝」を発行します。「文藝」は戦時中発行を続けた唯一の商業文芸誌として、文芸の灯を守り抜きました。

これって職業病?

野田の書いた文章(本・新聞・雑誌)には、校正のあとがびっしりと書き込まれています。時には、人からもらった本にまで…。編集者としての職業病かもしれませんが、あげた人からしたら少し複雑ですね。

文学散歩の創始者

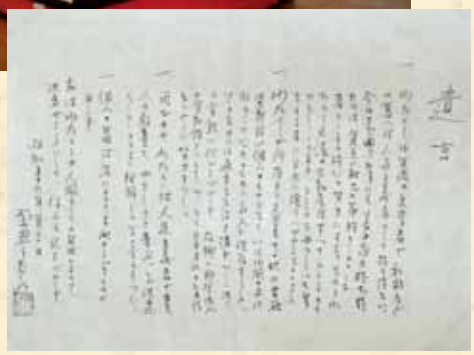
戦争や戦後復興により消えていく東京の文学的遺産を発掘・記録するため、昭和26（1951）年1月、野田は新聞上で「新東京文学散歩」の連載を開始しました。翌年に文庫版がベストセラーになり、ラジオ放送されるなど一大ブームを巻き起こします。

文学散歩とは、文学ゆかりの地を実際に歩いて調査する、文学研究の一種です。

「文学散歩」は野田のライフワークとなり、74歳で亡くなるまで日本全国はもちろん海外の文学を調べていました。

給料5か月分の出費！

野田は、日本人とキリスト教の関わりにも強い興味を持っており、昭和43年に古本屋から「伊達政宗遣欧使節記」を15万円で購入します。
大卒初任給が3万円台の時代なので、ご家族はびっくりされたことでしょう。



野田宇太郎文学資料館

昭和59（1984）年に74歳で亡くなった野田の遺言により、約3万点の蔵書や資料が小郡市に寄贈され、昭和62（1987）年、それらをもとに野田宇太郎文学資料館が開館しました。

展示室では、野田の功績に関するパネル解説や、貴重な近代文学の資料が展示されています。小郡市立図書館と同じ建物ですので、図書館利用の際にご来館ください。

野田宇太郎生誕祭 入場無料

野田の実家跡に建てられている「水鳥」詩碑の前では、毎年野田の誕生日（10月28日）に近い10月最後の日曜日に生誕祭が行われています。生誕祭の開催にあわせて公募する献詩には、例年多くの作品が寄せられ、生誕祭当日には、献詩の受賞者による詩の朗読や野田が作詞した曲が合唱されます。

❖**日時**　10月27日（日）／10時半～12時半
❖**会場**　野田宇太郎「水鳥」詩碑前